

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ことばが語と文法からなるというのは、ことばをある切り口で切ったときの一つの事実ではある。しかしそうして切り取ったことばには、一つ、決定的に欠ける点がある。それはことばのもつ対話性を二次的にしか考えられないという点である。ことばはそもそも他者とのかわりの場で働くもの。ところが〈語―文法〉的なことば観は、しばしば独我論的で、そこに他者とのかわりが見えてこない。

もちろん、ことばを道具として獲得したのちに、その道具を使って他者と対話することにはなる。しかしそこにおいて、対話はことば獲得の結果であって、それ以上のものではない。言い換えれば、このことば観のなかでは、ことばが獲得されたのち、それによってはじめて他者との対話が可能になるのであって、他者との対話（もちろんことば以前の）からことばが生まれてくるという発想がない。つまりことばそのものもつ第一次的、本質的な対話性に目を向ける視点が、そこにはすっぽり抜け落ちているのである。^Aこのことば観によっては、ことばが私たちの生活世界において働くその様をありのままに見ることはできない。

身体とことばを共通の糸でむすぶのは、おそらくこの対話性である。とすれば、ことば自体のもつ対話性の切り口を離れて、身体とことばのかかわりを見てとることはできない。現に〈語―文法〉的ことば観においては、ことばが身体性に接続する土俵がまったく見えないように、私には思える。

(浜田寿美男『「私」とは何か』による)

問 傍線部④「このことば観」とあるが、それはどのような「ことば観」か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① ことばは他者との対話から生まれ、〈語―文法〉的に運用されているということば観。

② ことばは道具として獲得され、他者との関係の場で機能しているということば観。

③ ことばを生活世界とのかかわりで運用し、対話性への視点を欠落させていることば観。

④ ことばを〈語―文法〉的にとらえ、他者との対話性を模索しようとすることば観。

⑤ ことばを他者との関係の場から切り離し、本質的な対話性を喪失させていることば観。